ビブリオバトル 紹介本大集合

まとめの用紙に、それぞれの紹介本を改めて紹介してもらいました。全学年、全部の中から紹介します。次に読む本の参考にしてくださいね。

『八月の六日間』　北村薫著

文芸誌の副編集長として働く女性が山歩きと出会い、擦り減った心をほぐしていくお話です。主人公の見ている景色をありありと想像することができ、まるで自分がその場にいるような気持ちになれると思います。

『空想科学読本』　柳田理科雄著

この本はアニメでおこった現実ではありえない出来事を科学的に解き明かす本です。例えば、サザエさんのエンディングでの家の揺れで中に入った人はどうなっているかとか、キャプテン翼のボールの蹴る力とかです。他にもいろいろなアニメでこのような面白いことを書いてあるので是非読んでみてください。

『歯みがきつくって億万長者』　ジーン・メリル 著

このお話は、経済について学べる機会を与えてくれます。ふだん考えることのないことを考えて、自分の人生をより豊かにしてくれると感じました。

『火車』　宮部みゆき著

ある日突然消えた女性。その女性を探す刑事が次々に真実を明らかにしていくという話です。途中で消えた女性Sさんが二人存在することがわかります。なんとそのうちの一人はどこにいったのかもわからなくて、始めに探していた女性は途中で別人に変わっていたというミステリーな話。最後には衝撃の結末があります。

『星の王子さま』ｻﾝ=ﾃｸﾞｼﾞｭﾍﾟﾘ著

大人になりたくない主人公が、ある小さな星からやってきた王子さまに出会う話。地球のことをあまり知らない王子さまに主人公は絵をかいてあげて、二人は友だちになっていく。海外の本だから訳者によって文が変わるのも楽しみどころ。

『何のために学ぶのか』　池上彰著

何のために学ぶのか、その意義がまとめられていました。学びとは決して誰にも盗まれない財産です。

『アルジャーノンに花束を』　ダニエル・キイス著

この話は「本当に知的であることが幸せなのか？」ということを考えさせられます。心優しいチャーリーがどんどんかわっていく姿もこの本の興味深い点です。この本の翻訳もすばらしいです。

『西の魔女が死んだ』　梨木香歩著

人間関係に疲れ、不登校になってしまった主人公まいが、自らを「魔女」という祖母の家で、新学期の始めを過ごします。一度読むだけで、言葉では言い表せない多くのものを得ることができました。自分で判断することの大切さや人の考え方に惑わされないように生きるなど、人間として何か大切なものをもらえます。あなたも一度手にとって読んでみて、心を癒やしてみませんか。

『オルタネート』　加藤シゲアキ著

この本は高校生限定のマッチングアプリ「オルタネート」を題材とした物語で、三人からのそれぞれ違う視点で構成されている。この三人がお互い直接連絡を取り合ったわけではないのに、オルタネートの力によって、三人が同じ場面にそろうのが面白いと思った。

『おおかみこどもの雨と雪』　細田守著

この本はもともと映画版を観たことがあり、読んでみたいと思って選びました。本の中で一番心に残っている言葉は「同じ団地でも、家の中はまるで違うんだ。お金のあるうち。ないうち。家族のたくさんいるうち。ひとりのうち。赤ん坊のいるうち。年寄りだけのうち。」家族のかたちが自由であるように、幸せのかたちも色々なんだなと思い知らされました。

『ぼくはｲｴﾛｰでﾎﾜｲﾄでちょっとﾌﾞﾙｰ』　ブレイディみかこ著

これは海外に住む親子の話で、子どもの視点からの差別や貧困といった現代の問題についての意見が書かれていて、なるほどなと思わされます。またそれにどう向き合っていくかを考えさせられる本です。

『植村直己ー地球冒険62万キロー』　岡本文良著

この本は、植村さんの登山に対する野望とか葛藤を感じられる本です。植村さんの、やると決めたらやり通す性格により次々と目標を達成していくところに勇気をもらえます。あきらめないことの大切さを感じました。小見出しで区切られていることもあり、最後まで読みやすいです。

『たゆたえども沈まず』　原田マハ著

ファンセント・ヴァン・ゴッホが絵を描き、そして最後自死するまでの話です。死後評価されるようになった彼の生前、弟テオや日本人画商林との絆や関係がフィクションを交えながらも美しく書かれています。当時の画界における日本工業品と西洋の関わり、影響などもよくわかっておもしろいと思います。

『花の鎖』　湊かなえ 著

別々の三つのストーリーで三人の女性がそれぞれ主人公で進んでいきます。途中、謎の男Kがいるのですが、Kによって三人の人生が狂っていきます。その三つのストーリーを通じて人間関係や社会というものを生々しく見れて、私自身とは違う人生を歩む女性に少しぞくっとしました。意味がわからずに進んでいきますが、最後三つのストーリーがかちっと合わさったとき、今まで別々だった三人の女性の関係性、Kが誰なのか、話の中の言葉の意味がバッとわかって鳥肌が立ちます。二回読めばさらに深く分かります。本当に面白いです。

『ある晴れた夏の朝』 小手鞠るい著

この本はアメリカの高校生が原爆に賛成か反対かについて、二つのチームに分かれてディベートする話です。この話の主人公は反対派で反対派の目線で描かれています。日本に落とされた爆撃の大きさや日本が他国に対して行ったことなどを知ることができ、自分の考え方が変わるかもしれません。

『櫻子さんの足下には死体が埋まっている』 太田紫織著

主人公の櫻子さんは骨が大好きな骨格標本士で、「少年」と呼ばれている正太郎は平凡な高校生で、この二人の最強タッグで事件を解決していくストーリー。櫻子さんは非常識で毒舌な部分が多々あるが発言の一言一言がすごくかっこいい。ドラマ化されるくらいに人気がある。シリーズ化されており、読んでいくごとにその世界観に引き込まれていく。

『偽りの春』 降田天著

本に出てくる犯罪者五人とともに自分たちも狩野という警察官にだまされていくところがゾワッとします。

『トリガール』 中村航著

この本は女子がほとんどいない理系大学に進学した鳥山ゆきなが、新入生勧誘で人力飛行機サークルに出会い、苗字が“鳥山”というだけで強引にサークルに入部させられる。エンジョイ&ラブリーな学生生活を送るはずが、いつしかパイロットとして鳥人間コンテストに出場することになってしまいます。地元の琵琶湖で行われる鳥人間コンテストの話で、映画化されたのでおすすめです！

『ツナグ』 辻村深月著

あなたは「あの世」について考えたことはありますか？一生に一度、一死に一度だけ使える権利。亡くなった人に会いたい。そう思い続けた人だけがたどりつく電話番号。死者と生者をツナグ者の正体とは？辻村深月が書く「あの世」と「この世」の本です。

『そして、バトンは渡された』 瀬尾まいこ著

この本は家族をテーマにした本です。主人公である優子という女性は父親が三人、母親が二人いて、親が変わっていきその一つ一つの家族を描いています。家族の様子は全く違うけど、全ての家族が素敵で主人公である優子もどの家族も良いと言っています。心に残った言葉は「娘を持つということは未来が二つになるということだよ」です。明日がさらに楽しみになるということを言っているのだと感じました。

『拝啓、十年後の君へ。』 天沢夏月著

十年後の自分に向けて書いた手紙が、今、恋や進路、部活、人間関係など若者ならではの様々な悩みをかかえた高校生たちの運命を変えていく青春小説です。

今の自分と重なる部分や共感できるところがたくさんあって、まるで自分にも向けられた小説だなと思いました。

『虫の味』 篠永哲著／林晃史著

作者は二人とも過去に「日本衛生動物学会賞」を受賞している人。この本はそれぞれ食べる昆虫について少し紹介した後に、色んな調理法を試して、どんな味かを述べる「調査書」みたいな本です。昆虫食自体は世界でも話題になっていると思うし、日本でも昔は当然のように昆虫食が食べられていたので、日本にも関係があると思います。昆虫食が気になったら、ぜひこの本を読んでみてください。

『ナニワ・モンスター』 海堂尊著

新型インフルエンザが流行した日本を、大阪を中心に医療従事者と府知事の二つの視点で書いた物語。メディアの誤報や偏向報道についての描写も多いため、普段自分が見ている情報が正しいのかと考えるきっかけになる。

1,2年生は、高体連中に読書の時間があります。各自、読もうと思う本を準備しておいてください。

『死神の精度』 伊坂幸太郎著

この本には個性的な登場人物がたくさん描かれています。主人公の千葉という死神は、七日間でその人の死の可否を判断して八日目に実行します。感情のある人間と感情のない死神のやりとりに注目してほしいです。

『夢幻花』 東野圭吾著

“黄色いアサガオは追いかけるな”などの印象深いキャッチコピーのように、この物語は、ある一人の老人の死をきっかけに黄色いアサガオの正体についてつきとめる主人公の話です。

何か隠しているような主人公の兄、父。子供の頃に出会ったが突然連絡が途絶えた少女。死んだ老人の孫の正体。主人公の母の過去。“黄色いアサガオ”“夢幻花”の謎がいくつもの謎を少しずつ明かし、最後までひっぱられる作品です。

『コロナの時代の僕ら』 パオロ・ジョルダーノ著

コロナウィルスについて知れるだけでなく、イタリアの感染対策と日本の感染対策の違いを考えながら読んだり、様々な楽しみ方ができる本です。筆者の問いかけの一つ一つは私たちを考えさせるものであり、非常におもしろい作品です。

『飛びたがりのバタフライ』 櫻いいよ著

心に傷を負った二人の高校生が自由を求めて二人だけで旅に出るお話です。学校での人間関係や家族とのつながりについて考えさせられます。ラストが本当に衝撃的で結末を知った上で、もう一度読み返したくなるような本です。

『地球のはしからはしまで走って考えたこと』 北田雄夫著

世界で最も過酷なレース（アドベンチャーマラソン）に筆者がいどみ日本人初の七大陸走破を成し遂げる話です。

周りになんと言われようと、レースをあきらめず、挑戦する姿に感動した。